

秋田県文化財調査報告書第537集

岩 坂 下 遺 跡

— 県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2024・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩鏡」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7 cm、凝灰岩。

岩^{いわ}坂^{さか}下^{した}遺跡

— 県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2024・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,200か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていく上で欠くことのできないものであります。

一方、北秋田地域においては、「生活道路の整備促進」を目的に、県道における線形改良や現道路拡幅などの道路改良整備が進められています。本教育委員会では、こうした事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）に先立って令和4年度に北秋田市において実施した岩坂下遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、平安時代の堅穴建物跡や中世の掘立柱建物跡のほか、土師器や鉄滓が出土し、糠沢川流域に暮らした人々の営みが浮かび上がってきました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県北秋田地域振興局建設部、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

秋田県教育委員会

教育長 安田 浩 幸

例言

- 1 本書は、県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）に伴い、令和4年度に実施した北秋田市所在の岩坂下遺跡の報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 2 調査要項
遺跡名 岩坂下遺跡（いわさかしたいせき）
遺跡略号 2ISS
遺跡所在地 秋田県北秋田市綴子字深沢地内
調査機関 令和4年7月4日～8月5日
調査目的 県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）
調査担当者 山村 剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）
宇田川 浩一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）
整理担当者 富樫 那美（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主任）
総務担当者 小松 恵美子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）
調査協力機関 秋田県北秋田地域振興局建設部 北秋田市教育委員会
- 3 本報告書に使用した図は、秋田県北秋田地域振興局建設部提供の1/500工事図面（第2図）、及び国土地理院発行の1/25,000地形図『藤琴』『早口』『鷹巣西部』『鷹巣東部』（第5図）を複製した。なお、第3章第1節の地形図には方位記号を付けていないが、原則として上が世界測地系第X系座標北を示している。
- 4 本書に使用した空中写真は、株式会社みどり光学社に委託したものである。
- 5 理化学的分析は、株式会社吉田生物研究所に委託した。また、水準測量・水準杭設置業務は、高橋測量有限会社に委託した。
- 6 本書の草稿は山村・富樫が作成し、本文第1～3章、第5章の執筆及び遺物の写真撮影、第4章レイアウトは富樫が行った。第3章の出土遺物の記述は村上が行った。編集は富樫・村上が行った。
- 7 本書を作成するにあたり、榎本剛治氏よりご指導・ご助言を賜った。

凡例

- 1 本報告書に記載した平面図（遺構実測図）の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標北を示す。座標北から磁北の偏角は西北 $9^{\circ}12'36''$ である。
- 2 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査と整理作業の過程で変更や欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は以下の通りである。

S I : 竪穴建物跡 S B : 掘立柱建物跡 S A : 櫓列跡 S K P : 柱穴様ビット
S K : 土坑 S N : 焼土遺構

- 3 土色表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2010年版に拠った。
- 4 遺跡基本層序はローマ数字で、遺構内層位はアラビア数字で表記した。
- 5 遺構の法量について、()内の数値は、それぞれ残存値・復元推定値を表す。
- 6 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を示した。
- 7 遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方向及び距離を示している。それぞれEWSNは東西南北を示し、例えば「MA50+W 2.0m」であれば、MA50杭から真西に2mの地点であることを示す。
- 8 遺構のトーンの凡例は以下の通りである。



目次

序	
例言	
凡例	
目次	

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 遺跡の立地と概観	5
第3節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
1 発掘調査	11
2 整理作業	11
第2節 基本層序	14
第3節 検出遺構と遺物	16
1 概要	16
2 平安時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴建物跡	16
(2) 櫓列跡	17
(3) 焼土遺構	18
3 中世の遺構と遺物	18
(1) 孤立柱建物跡	18
(2) 櫓列跡	19
4 時期不明の遺構と遺物	20
(1) 櫓列跡	20
(2) 柱穴様ピット	21
(3) 土坑	21
第4章 理化学的分析	35
第1節 放射性炭素年代測定	35
第2節 樹種同定	36
第3節 種実同定	37
第5章 総括	39
図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	工事計画と調査範囲	2
第3図	遺跡周辺の地形区分図	6
第4図	遺跡周辺の表層地質図	6
第5図	岩坂下遺跡と周辺遺跡位置図	9
第6図	グリッド配置図	12
第7図	基本土層位置図・遺構配置図	13
第8図	基本土層図(1)	14
第9図	基本土層図(2)	15
第10図	S I 02竪穴建物跡	22
第11図	S I 04竪穴建物跡	23
第12図	S A 03柵列跡	24
第13図	S A 12柵列跡	25
第14図	S N 27～29・93焼土遺構	26
第15図	S B 09掘立柱建物跡	27
第16図	S B 26掘立柱建物跡	28
第17図	S A 01・06・10柵列跡	29
第18図	S A 10・56・57柵列跡	30
第19図	S K P 15・30～32柱穴様ビット、S K 11・16・39土坑	31
第20図	出土遺物	34
第21図	No.1 広葉樹の樹皮写真	37
第22図	分析結果写真	38
第23図	岩坂下遺跡遺構変遷図	40

表 目 次

第1表	岩坂下遺跡と周辺遺跡一覧表	10
第2表	遺構柱穴計測一覧表	32
第3表	柱穴様ビット計測一覧表	33
第4表	測定試料及び処理	35
第5表	放射性年代測定及び暦年較正の結果	36
第6表	出土炭化材同定表	37
第7表	種実同定試料表	38

図版目次

- 図版 1 遺跡遠景（上から）
- 図版 2 遺跡遠景（北東から）
同上（東から）
- 図版 3 調査区北端（南から）
調査区北端（北から）
S I 04完掘（西から）
S I 04遺物出土状況（南から）
S I 04カマド断面（西から）
- 図版 4 調査区中央（北から）
基本土層 C（西から）
S I 02完掘（北から）
S I 02張り出し溝断面（西から）
基本土層 D（西から）
- 図版 5 S B 09完掘（北西から）
S B 26・S A 10確認状況（東から）
- 図版 6 S K P 58・59・60・61（S A 03・07）
断面（南西から）
S K P 58・59・60・61（S A 03・07）
完掘（南西から）
S A 12確認状況（南から）
S A 12完掘（南から）
S N 27確認状況（西から）
S N 27断面（北から）
S N 28確認状況（西から）
S N 28断面（西から）
- 図版 7 S N 93確認状況（西から）
S N 93断面（西から）
調査区南端（南から）
調査区南端（北東から）
S K P 46遺物出土状況（東から）
S K P 46遺物出土状況（南から）
基本土層 E（東から）
- 図版 8 出土遺物（鉄滓）
出土遺物（土師器甕）
出土遺物（土師器甕）

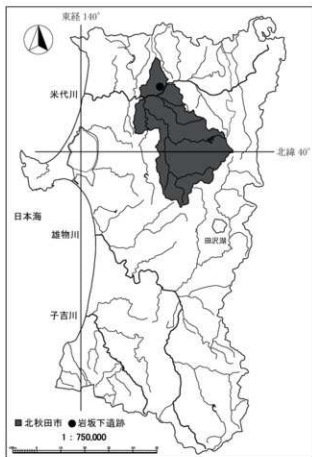
第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

県単道路改築事業一般県道矢坂権次線（岩坂下工区）は、北秋田地域振興局建設部の重点施策である「地域間ネットワークの構築と生活道路の機能強化」のひとつ、「生活道路の整備推進」を目的とし、地域の安全・安心の確保や経済活性化の支援のために、県道における線形改良や現道拡幅などの道路改良整備をすすめる事業である。

事業主体者である秋田県北秋田地域振興局（以下、北秋田地域振興局）は、秋田県教育委員会（以下、県教委）に対し、事業に伴う埋蔵文化財分布状況と今後の対応について調査を依頼した。

県教委は、令和元年10月11日に当該地域の試掘調査を行い、新たな遺跡1か所を発見、550㎡について本発掘調査が必要であると判断し、北秋田地域振興局に報告した。協議及び連絡調整を経て、令和4年度に秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。



第1図 遺跡位置図

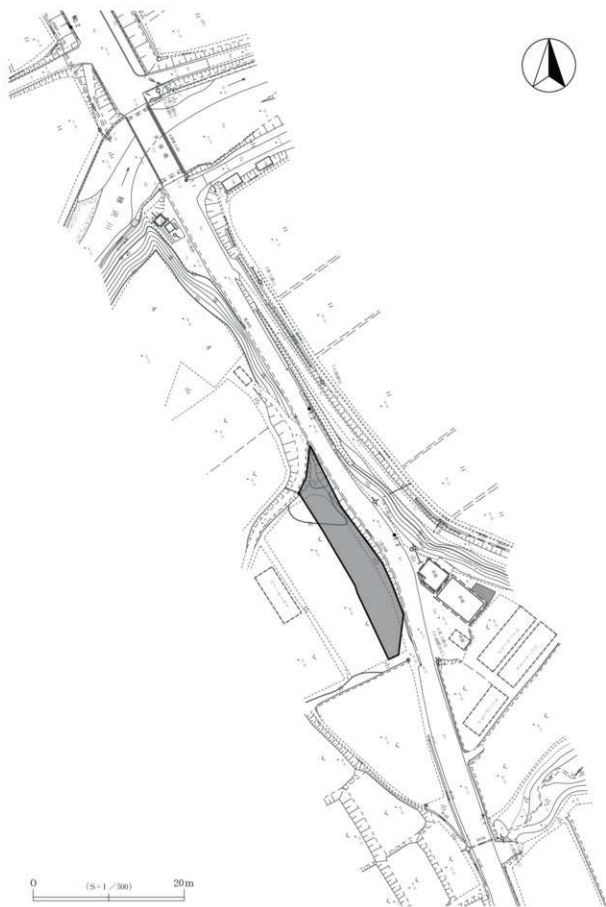
第2節 調査の経過

発掘調査は550㎡の範囲を対象に、調査員2名、作業員12名の体制で実施した。期間は令和4年7月4日（月）から8月5日（金）までである。以下に調査の経過を1週ずつ記述する。

【第1週】

7月4日（月）～7月8日（金）

機材を搬入し、調査区境の表土除去を行った後、調査区南側から精査を開始した。調査区南端で基本土層Eを設定し、写真撮影及び土層断面図を作成した。その結果、調査区南端では僅かにⅢ層が残るものの、Ⅱ層は現代の造成により大きく削平されていることが判明した。S I 02、S D 01・02を検出し、精査を行ったところ、S I 02は東側が調査区外に広がること、長軸が4mあまりあることが判明した。また、床面から焼土を検出した。S D 01・02は幅60cmで東西方向に平行して走り、両溝の間隔は約7mであった。時期不明の約40基の柱穴椽ビット群を検出し、MA50以南の粗掘が完了した。粗掘中、縄文時代の石器・土器片が出土した。4日、高橋測量有限公司と打ち合わせを行った。



第2図 工事計画と調査範囲

【第2週】

7月11日（月）～7月15日（金）

調査区表土除去の続き及びSD01・03、S102、SA06の精査を行った。また、新たにS104、SQ07を検出した。SD01からはビニール等が出土したため、その上面から検出されたSN05の時期も近代以降と判断した。SD03から縄文時代の石器が出土した。S102からは、北側に壁溝を伴う張り出しが検出された。また、S104は検出面が既に床面であったが、周囲に幅10cm程の壁溝を確認した。11日、バリノ・サーヴェイ株式会社高野氏が見学のため来跡。今週の見学者は3名。

【第3週】

7月19日（火）～7月22日（金）

調査区表土除去の続きとS102・04、SD01・03、SA10・12、SB10、SQ07の精査を行った。また、新たにSB09を検出した。S102・04の貼床除去中、S102から鉄溝が、S104からは土師器片が出土した。SA10は精査の結果、2間×1間、SB09は4間×3間以上になることが分かった。SB10を完掘し写真を撮影した。SQ07は完掘した結果、自然流路中にボットホール状に堆積した自然礫と判断した。

【第4週】

7月25日（月）～7月28日（木）

調査区北側及びSB09、柱穴様ビット群の精査を行った。また、S102・04を完掘し、終了写真を撮影した後、空撮のための遺跡内清掃を行った。26日、北秋田地域振興局石倉技師来跡。今週の見学者は2名。

【第5週】

8月1日（月）～8月5日（金）

S102付近の柱穴様ビット群の精査と記録、調査区内外の清掃、空撮を行った。また、大雨によって排土が道路へ流出したため除去作業を行った。発掘器材等のトラックへの積み込み、コンテナハウス撤去等を行い、発掘調査の全工程を終了した。2日、北秋田地域振興局石倉技師、他1名来跡。4日、現地引き渡しのため、北秋田地域振興局石倉技師、文化財保護室加藤副主幹、埋蔵文化財センター中央調査班長来跡。今週の見学者は1名。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和4年8月の調査終了時から、令和6年3月まで秋田県埋蔵文化財センター中央調査班で実施した。

調査の記録写真は調査後に台帳化し、必要なものについて現像を行い、図版作成に備えた。実測図等の記録図面も点検を行った後に台帳化し、整理した。図面をスキャナーでスキャンし、第2原図作成及びデジタルトレースを行った。不備や問題のあるものは、この時点で写真等を参照しながら修正を加えた。また、報告書本文の執筆・表・地図等の作成については、担当者が継続的に行った。

遺物は調査終了後、速やかに洗浄を行い、その後、注記・台帳化・写真撮影・実測等を行った。令和5年度には、実測図のデジタルトレースや挿図・図版の版組を行うとともに、報告書本文の加筆・

第1章 調査の経過

修正や編集作業にあたった。令和6年1月に入稿し、整理収録作業は、主に令和6年2～3月にかけて行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

岩坂下遺跡は、秋田県北秋田市綴子字深沢地内に所在する（第1図）。遺跡の所在する秋田県北秋田市は、県北部中央に位置し、いわゆる「平成の大合併」により、2005（平成17）年に鷹巣町・森吉町・合川町・阿仁町が合併して誕生した市で、面積は1,152,76km²と、県全体の10%を占めている。東は大館市・鹿角市、南は上小阿仁村に隣接し、秋田・青森・岩手の3県にまたがる標高1,024mの中岳に源を発し、秋田県北部を西流して日本海へそそぐ米代川の中流部に位置する。915（延喜15）年とされる十和田火山の大噴火の際には、大規模な火山泥流が発生し、米代川流域の沖積地を埋没させた。遺跡の南西5.2kmにあり、北秋田市指定史跡に指定されている胡桃館遺跡は、その際に埋没したものとされている。

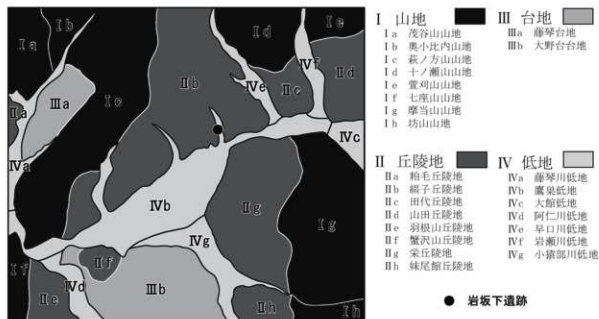
遺跡は、北緯40°16′24″、東経140°23′35″、JR奥羽本線糠沢駅から北へ3km、標高50mに位置し、周囲は主に水田として利用されている。遺跡周辺の地形は、『土地分類基本調査 鷹巣』によると、山地・丘陵地・台地・低地の4つからなり、本遺跡は、米代川に沿って東西に広がる鷹巣低地（IVb）の、米代川支流糠沢川の右岸に形成された南北に延びる河岸段丘上に立地する。

鷹巣低地には、糠沢川の他にも、早口川・岩瀬川・綴子川等が米代川に流れ込んでおり、それぞれが河岸段丘を形成している。遺跡が立地する河岸段丘の周囲には綴子丘陵地（IIb）が広がり、その西に萩ノ方山山地（Ic）、東に早口川低地（IVe）を挟み十ノ瀬山山地（Id）、田代丘陵地（IIc）が広がっている（第2・3図）。

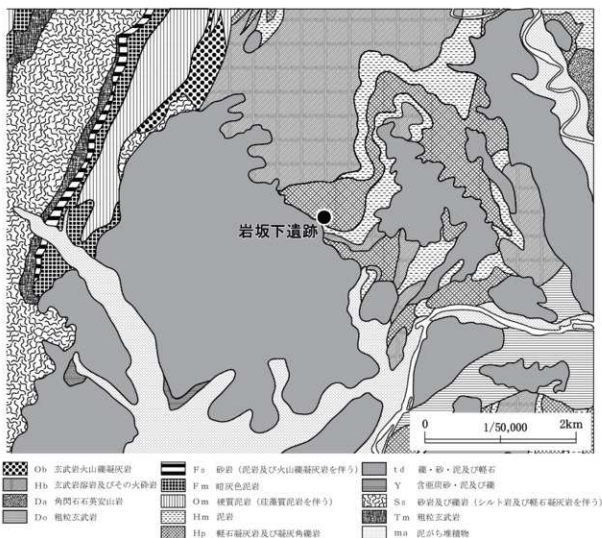
本地域の地質は、下位から藤倉川層・黒石沢層・早口川層（Hb・Hd・Hm・Hp）・女川層（Ob・Om）・船川層（Fm・Fs）・天徳寺層（Tm）・笹岡層（Ss）の新第三系、湯車層（Y）・段丘堆積物（td）及び沖積層（ma）の第四系からなっている。新第三系の下位3層は、いわゆる「グリンタフ」に属し、各種火山岩類及びその火山砕屑物を主体として本地域東半部に分布する。新第三系の上位の地層は、「油田第三系」に属し、主に海成の堆積岩からなり、火山岩の溶岩を挟んで西半部に分布している。遺跡周辺の地質は、早口川層の石英安山岩質ないし流紋岩質の軽石凝灰岩・凝灰角礫岩（Hp）を主体とし、その周囲は同層の玄武岩溶岩及びその火砕岩（Hb）、砂岩及び軽石凝灰岩を伴う泥岩（Hm）、礫・砂・泥及び軽石を主とする段丘堆積物（td）により構成されている（第4図）。

第2節 遺跡の立地と概観

岩坂下遺跡は、糠沢川右岸の河岸段丘上に立地する。糠沢川は本遺跡の北側から北西40mの地点を東流したのち、流路を南方に変え、秋田県内2番目の流域面積を有し北秋田市北部を東西に貫流する米代川に注ぐ。糠沢川流域は、羽州街道に沿っており、中世は浅利氏領であったが、16世紀後半には安東（秋田）氏に包摂された歴史をもつ。また、本遺跡所在地の大字である綴子は、その地域の大半が山地である。本遺跡の調査前の状況は、東側に県道矢坂糠沢線が走り、周囲の水田よりも標高が高い平坦な荒蕪地となっていた。調査では農地整備に伴う削平を確認した。本遺跡のMA50付近と糠沢川の比高差は9.9mである。



第3図 遺跡周辺の地形区分図



第4図 遺跡周辺の表層地質図

第3節 歴史的環境

北秋田市では、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されている。それらは主に米代川とその支流等によって形成された、河岸段丘上や丘陵地・台地上に多く立地している。ここでは、岩坂下遺跡（1）周辺を中心に、その歴史と周辺遺跡を概観する。なお、文中の番号は、表及び図中の番号に対応し、表中の「213-11-81」等の表記は、『秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』及び『秋田県遺跡地図情報』に掲載されている遺跡の地図番号と一致する（第5図、第1表）。

1 旧石器時代の遺跡

当該期の遺跡は、大畑遺跡（21）・脇神館跡（66）がある。大畑遺跡からは大正時代に尖頭器が発見され、脇神館跡からは石刃を素材とするナイフ形石器が1点出土した。いずれも遺物が発見されたのみで、遺構は検出されていないため、当時の様相については不明である。

2 縄文時代の遺跡

当該期の遺跡は、矢石館遺跡（2）・高森岱遺跡（56）・藤株遺跡（57）・小勝田館跡（61）・伊勢堂岱遺跡（65）・法泉坊沢Ⅰ遺跡（69）・法泉坊沢Ⅱ遺跡（70）・からむし岱Ⅰ遺跡（71）・からむし岱Ⅳ遺跡（74）がある。矢石館遺跡は、石棺状組石が検出されたことにより注目された縄文時代晩期の遺跡で1953（昭和28）年に県指定史跡となっている。藤株遺跡は、県教育委員会による1980（昭和55）年の国道105号バイパス建設に伴う発掘調査で頭部のない人骨の火葬墓が検出され、縄文時代後期から晩期を中心とする遺跡であることが判明した。2012（平成24）年に行われた県教育委員会による発掘調査では、縄文時代早期中葉の竪穴建物跡が検出され、縄文時代早期から晩期にわたる遺跡であることが分かった。小勝田館跡は、縄文時代後期前葉を中心に墓域・貯蔵域・狩猟域として利用されていた遺跡で、墓と推測される小型の土坑・土器埋設遺構が検出されている。伊勢堂岱遺跡は、大館能代空港アクセス道路建設のため発掘調査が行われ、縄文時代後期前葉の環状列石とそれに伴う掘立柱建物跡等が検出され、当初の道路建設計画を変更して現地保存された。2001（平成13）年1月に国指定史跡となり、2021（令和3）年7月には世界文化遺産に登録されている。当地域においては、縄文時代の中でも特に縄文時代後期から晩期にかけての遺跡が多く、この時期の人々の活動が活発であったことがうかがえる。

3 続縄文・弥生時代の遺跡

当該期の遺跡は、みのり台遺跡（16）・鰯口遺跡（38）・からむし岱Ⅱ遺跡（72）がある。からむし岱Ⅱ遺跡からは続縄文時代の壺形土器が出土したと報告されているものの、遺構が検出されていないため、弥生時代から古墳時代の様相については不明である。

4 古代の遺跡

当該期の遺跡は、後田遺跡（4）・大畑神社遺跡（20）・上台遺跡（25）・胡桃館遺跡（44）・小勝田館跡・小ヶ田埋設家屋（63）・伊勢堂岱遺跡・脇神館跡（66）・法泉坊沢Ⅰ遺跡・法泉坊沢Ⅱ遺跡・からむし岱Ⅰ遺跡・からむし岱Ⅴ遺跡（75）がある。胡桃館遺跡は、今から約1,100年前の火山泥流シラス洪水によって埋没した、官衙的性格をもつ遺跡である。鷹巣町立鷹巣中学校（現北秋田市立鷹巣中学校）の運動場造成作業中に土師器・須恵器、掘立柱等が発見され、県教育委員会によって1967

(昭和42)年から1969(昭和44)年まで発掘調査が行われ、板校倉建物跡等4棟と掘立柱列(柵)・高床式の建物跡が検出されている。火山泥流堆積物中に建築材が建物の構造を残したままの状態で見出されたため、当時の建築技術を明らかにするうえで重要な資料となっている。小ヶ田埋没家屋は、1817(文化14)年に埋没家屋が見つかったとの記録があるが、発掘調査が行われていないため、その詳細や胡桃館遺跡との関連は不明である。脇神館跡は、古代末の防御性集落跡で、堅穴建物跡・空堀・溝跡・土坑・堅穴状遺構・焼土遺構が検出され、土師器・須恵器が出土している。また、法泉坊沢Ⅱ遺跡からは、堅穴建物跡・フラスコ状遺構の他、鍛冶炉とそれに伴う多量の鉄滓が検出され、製鉄に関連する集落であったと推測される。

5 中世の遺跡

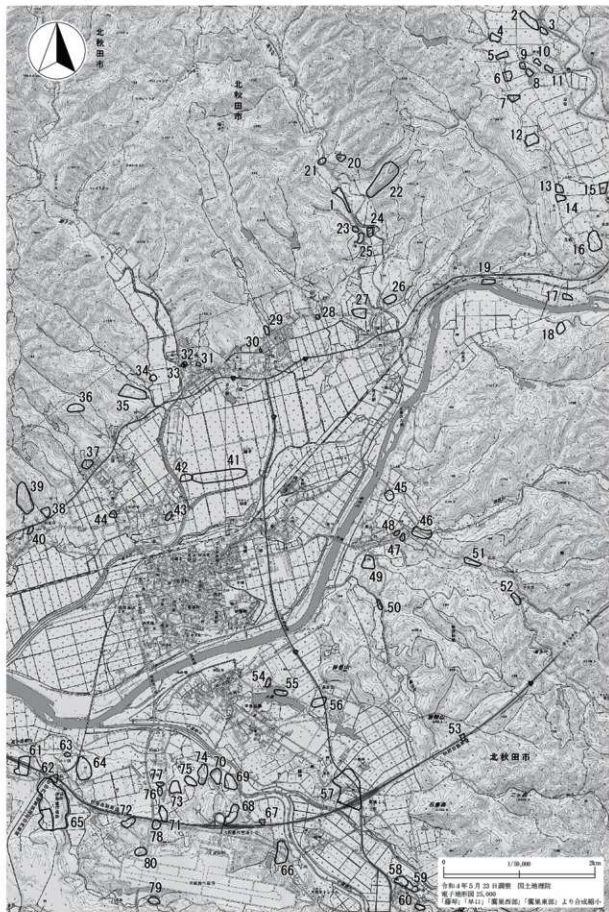
当該期の遺跡は、大畑下館跡(22)・綴子館跡(35)・坊沢高館跡(39)・館平館跡(49)・小森館跡(59)・小勝田館跡・槐岱道上館跡(64)・脇神館跡等の中世城館の他、ハケノ下遺跡(67)・からむし岱Ⅰ遺跡がある。脇神館跡からは空堀・土塁・堅穴状遺構・土坑が検出され、堅穴状遺構内からは炭化米・雑穀が出土した。ハケノ下遺跡からは掘立柱建物跡・土坑・柱穴様ビットの他、中世末から近世にかけて耕作されていた水田跡が7面検出され、からむし岱Ⅰ遺跡からは火葬墓が検出された。

6 近世の遺跡

当該期の遺跡は、ハケノ下遺跡・脇神館跡・からむし岱Ⅰ遺跡がある。ハケノ下遺跡からは水田跡が検出され、陶磁器や釘・煙管等の金属製品、砥石等の石製品が出土した。また、脇神館跡からは塚跡や16世紀後半の陶磁器が、からむし岱Ⅰ遺跡からは掘立柱建物と陶磁器が見つかり、調査例は少ないものの、近世を生きた人々の生活の痕跡をみることができる。

参考文献

- 秋田県 『土地分類基本調査 蘆薫』 1980(昭和55)年
秋田県教育委員会 『秋田県の中世城郭』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
秋田県教育委員会 『法泉坊沢Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第278集 1998(平成10)年
秋田県教育委員会 『脇神館跡』 秋田県文化財調査報告書第284集 1999(平成11)年
秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡』 秋田県文化財調査報告書第293集 1999(平成11)年
秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(北秋田地区版)』 2006(平成18)年
秋田県教育委員会 『ハケノ下遺跡』 秋田県文化財調査報告書第483集 2012(平成24)年
秋田県教育委員会 『藤森遺跡(第2次)』 秋田県文化財調査報告書第494集 2014(平成26)年
秋田県教育委員会 『小勝田館跡』 秋田県文化財調査報告書第500集 2015(平成27)年
蘆薫町史編さん委員会 『蘆薫町史』第一巻 1992(平成4)年
今村義孝編 『日本歴史地名大系 秋田県の地名』 平凡社 1980(昭和55)年



第5図 岩坂下遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 岩坂下遺跡と周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名称	遺跡名	種別	遺跡・出土遺物	時期
1	213-11-08	岩坂下	土坑葬跡・石室葬跡	【縄文時代】古器【古瓦】竈穴遺物群・櫛形土器・土器類・群伴【中世】新石器時代の遺物・櫛形土器【古瓦】陶器群【縄文時代】土器類・古瓦・土坑・土坑	縄文時代・古代・中世・古墳
土器類					
1	204-10-10	矢倉	早期弥生前期500	高麗	【縄文時代】石器類・土器類・土器類
2	204-10-10	新倉	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器	縄文時代
3	204-10-11	新倉	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器【古瓦】土器類・群伴	縄文時代・古代
4	204-10-12	群伴	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
5	204-10-17	大石	早期弥生前期	【縄文時代】土器	縄文時代
6	204-10-18	高倉	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器【古瓦】土器類	縄文時代・古代
8	204-10-13	本郷	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器	縄文時代
9	204-10-14	本郷	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器【古瓦】土器類	縄文時代・古代
10	204-10-15	本郷	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器	縄文時代
11	204-10-16	本郷	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器	縄文時代
12	204-10-19	土手	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
13	204-10-20	丸山	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
14	204-10-21	丸山	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器群伴	縄文時代
15	204-10-22	霞	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器・古器	縄文時代
16	204-10-23	霞	早期弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
17	204-10-25	長坂小倉	高麗弥生前期	【縄文時代】縄文土器【新石器時代】縄文土器	縄文時代・新石器時代
18	204-10-21	長坂小倉	高麗弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
19	204-10-24	長坂	高麗弥生前期	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
新石器時代					
20	213-11-1	大塚	縄文土器群伴	【古瓦】群伴土器類	古瓦
21	213-11-79	大塚	縄文土器類	【古瓦】群伴土器類	古瓦
22	213-11-51	大塚	縄文土器類	【古瓦】群伴土器類	古瓦
23	213-11-96	大塚	縄文土器類	—	—
24	213-11-5	与志	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
25	213-11-2	与志	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	古瓦
26	213-11-4	与志	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	古瓦
27	213-11-67	与志	縄文土器類	—	—
28	213-11-5	小塚	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
29	213-11-6	大塚	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
30	213-11-10	大塚	縄文土器類	—	—
31	213-11-7	伊勢堂	縄文土器類	【古瓦】群伴土器類	古瓦
32	213-11-71	伊勢堂	縄文土器類	—	—
33	213-11-8	伊勢堂	縄文土器類	【縄文時代】縄文土器	縄文時代
34	213-11-14	伊勢堂	縄文土器類	【古瓦】土器類	古瓦
35	213-11-10	伊勢堂	縄文土器類	—	—
36	213-11-11	伊勢堂	縄文土器類	—	—
37	213-11-12	伊勢堂	縄文土器類	—	—
38	213-11-11	伊勢堂	縄文土器類	—	—
39	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
40	213-11-12	伊勢堂	縄文土器類	—	—
41	213-11-12	伊勢堂	縄文土器類	—	—
42	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
43	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
44	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
45	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
46	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
47	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
48	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
49	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
50	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
51	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
52	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
53	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
54	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
55	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
56	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
57	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
58	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
59	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
60	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
61	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
62	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
63	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
64	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
65	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
66	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
67	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
68	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
69	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
70	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
71	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
72	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
73	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
74	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
75	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
76	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
77	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
78	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
79	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—
80	213-11-13	伊勢堂	縄文土器類	—	—

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

遺跡の位置や遺物出土地点の記録に不可欠な方眼杭打設業務は専門技術者に委託した。方眼原点（MA50）は世界測地系平面直角座標第X系のX=30525.000、Y=-37421.000とし、ここから座標北方向の南北線及びこれに直行する東西線により、4m区画の方眼を組んだ。南北線は東から西に向かって…LS・LT・MA・MB・MC…と昇順になるアルファベットA～T20文字による2文字の組み合わせで、東西線は南から北に向かって…48・49・50・51・52…と昇順になるようアラビア数字でそれぞれ呼称した。この4m区画（以下グリッド）を、南東角を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせ「MA50」のように呼んだ（第6図）。

調査は、概ね旧耕作土の除去、包含層の掘り下げ、遺構確認、遺構精査の順で行った。排土は調査区北側隣接地の排土置き場に運搬した。掘り下げは、スコップ・ジョレン・移植ゴテを用い、人力で行った。

遺構は、種別を表すアルファベットの記号と検出順を表す通し番号を組み合わせ「SA01」のように呼称した。調査は、基本的に確認状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況を写真撮影し、実測・図化し、特徴を記述した。土師器、鉄滓等の遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。調査の記録は、断面図・平面図及び写真を用い、図の縮尺は1/20を原則とした。

図面作成は、人力で行った。写真はフルサイズ一眼レフレックスデジタルカメラによって撮影し、予備や作業過程等の撮影はコンパクトデジタルカメラを用いた。また、遺跡の位置や周辺の地形を上空から記録するため、ドローンを使用した空中撮影を委託により実施した。

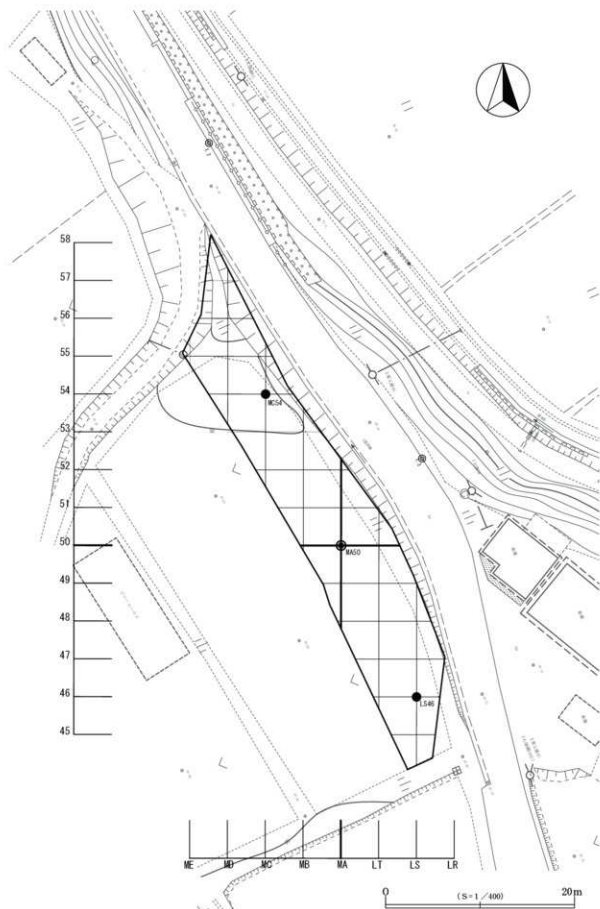
2 整理作業

遺構図面は、発掘調査で作成した図をスキャンし、デジタルデータ化し、平面図と断面図を組み合わせドローイングソフト（アドビシステムズ社製「Illustrator 2020」）によってデジタルトレースを行った後、第2原図を作成し、挿図を作成した。

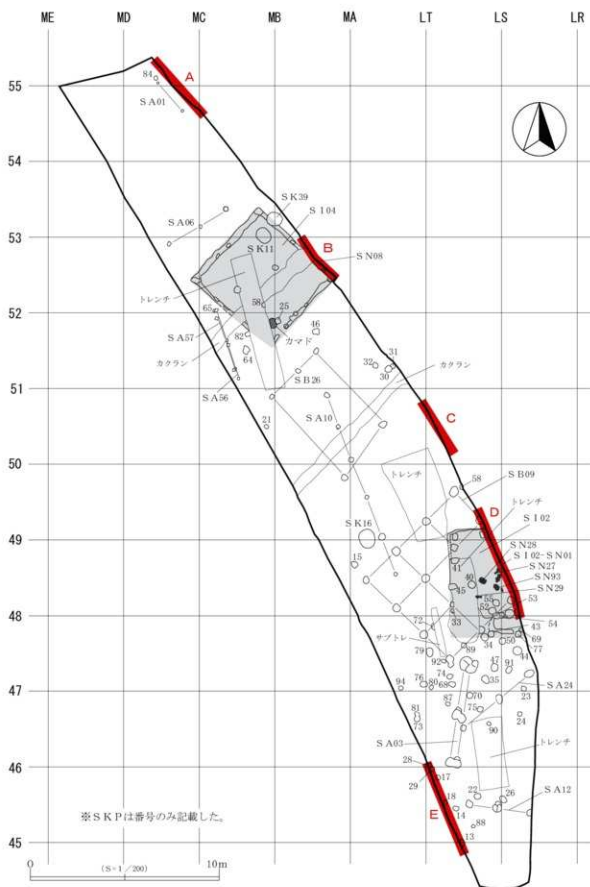
遺物は、洗浄後に白色ポスターカラーで注記を行った。遺物の図化については、実測図をスキャンし、ドローイングソフトでトレースを行った。調査で得た炭化材・土壌サンプルについては、遺構の形成年代や性格解明のため理化学的分析の専門機関に委託した。写真は、撮影したRAWデータを現像し、フルサイズで非圧縮のTIFFデータを生成して保存用とした。掲載写真はの中から選定、一部コンパクトデジタルカメラで撮影したデータも使用した。遺構・遺物の実測図及び写真は、ドローイングソフトによってレイアウトを行った。

本発掘調査に関する資料の収納、保管については、報告書に記載した出土品は、個別に挿図番号と実測図のコピーとともにポリエチレン袋に収納した。その後、挿図順にプラスチック製コンテナボックスに収納した。遺構原図等のマイラーベース及び遺物実測図類は、A2判のボックスファイルに収納した。デジタルデータ類は光ディスクに記録し、メディア用ファイルに収納した。

遺物及び図面、デジタルデータなどの調査関連資料は、秋田県埋蔵文化財センターで保管する。



第6図 グリッド配置図



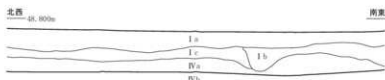
第7図 基本土層位置図・遺構配置図

第2節 基本層序

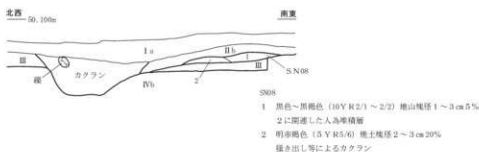
調査範囲境界及び坪掘りによって確認した層序は以下の通りである。

- I a層 黒色(10Y R 2/1) 壤土 しまり弱 粘性弱 植物根がマット状に発達 現表土
 I b層 砂利層 農道痕跡
 I c層 黒色(10Y R 1.7/1~10Y R 2/1) 壤土 しまり中 粘性中 地山土塊(φ5~30mm) 1~3%含む 旧耕作土
 II a層 黒色(10Y R 1.7/1) 壤土及び黒褐色(10Y R 3/2)の混合壤土 しまり強 粘性弱 地山土塊(φ1~10mm)・地山土粒(φ1~10mm)10%含む 包含層
 II b層 黒色(10Y R 1.7/1) 壤土 しまり強 粘性弱 地山土塊(φ5~50mm)及び地山土粒(φ1~5mm)30%含む 包含層
 III層 黒色(10Y R 1.7/1) 壤土及び黒褐色(10Y R 3/2)の混合壤土 しまり強 粘性弱 地山土粒(φ1~10mm)10%含む 漸移層
 IV a層 明黄褐色(10Y R 6/6) 壤土質粘土 しまり強 粘性中 耕作による地山
 IV b層 褐色~明黄褐色(10Y R 4/6~10Y R 6/8) 壤土質粘土 しまり強 粘性中 地山

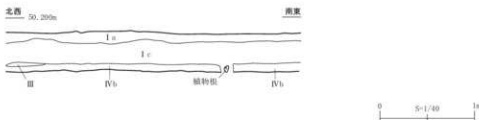
基本土層A



基本土層B

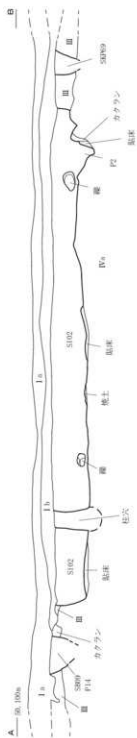


基本土層C

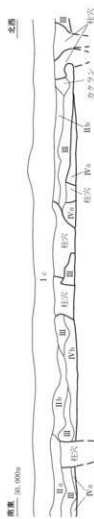


第8図 基本土層図(1)

基本土層D



基本土層E



第9図 基本土層図(2)

第3節 検出遺構と遺物

1 概要

調査区内で検出した遺構は、平安時代が竪穴建物跡2軒、櫛列跡2条、焼土遺構5基、中世が掘立柱建物跡2棟、櫛列跡3条、時期不明が櫛列跡3条、柱穴様ビット55基、土坑3基である。遺物は、縄文時代の剥片24点(372.18g)、平安時代の土師器2点、鉄滓1点、近世の陶磁器である。縄文時代の剥片と近世の陶磁器は全て遺構外からの出土である。

2 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

S I 02竪穴建物跡(第10・20図、図版4・8)

【位置】LR47・48、LS47～49に位置する。

【確認状況】地山上面で黒色土の広がりを出し、精査と土層断面観察により竪穴建物跡と判断した。

【規模・形態】平面形は、長辺4.95m、残存する短辺2.35m、主軸方向は真北で、Ⅲ層上面からの深さは0.46mである。南西側一部がトレンチで壊され、東側は調査区外のため全体像は不明である。北側残存部の様子から、平面形は方形と考えられる。床面に厚さ0.03～0.05mの貼床が認められた。A-B断面北側の土層断面から、壁は垂直に近い角度で立ち上がると推測され、A-B断面南側の土層断面からは、Ⅲ層を掘り込んでいることが確認できる。本遺構に伴う柱穴は4基確認された。P1は長軸0.40m、短軸0.25m、床面からの深さ0.35m。P2は長軸(推定)0.40m、短軸(残存部)0.25m。P3は長軸0.50m、短軸0.47m。P4は長軸0.35m、短軸0.25mで、P2・3・4の深さは不明である。本遺構南壁想定ラインでは幅0.25mの溝がL字形に張り出している。床面中央部からは焼土遺構が5基(S I 02-S N 01、S N 27・28・29・93)検出され、本遺構に伴う可能性が高い。S B 09掘立柱建物跡と重複する。平断面において切り合いは確認できなかったが、S B 09は中世の建物と推測されるため、本遺構が古い。

【埋土】3層に分けた。1層は地山土と旧表土由来の黒色土とが混和した壤土である。2層は地山土粒を含む黒色土、3層は黒色土を含む明黄褐色の貼床である。

【出土遺物】貼床下より鉄滓(第20図-1、図版8)が出土した。1は長さ4.2cm、幅2.65cm、重さ57.6gの製鉄関連の破片である。3か所に破面が認められる。右方向に重層(3～4層)し、流動単位は0.5cm程度である。重層の境目付近では気孔が目立つ。下面には、砂鉄が固着(焼結)しており、右破面に向かって浅い皿状の傾斜で立ち上がる。

【所見・時期】平面形や柱配置の特徴から平安時代の竪穴建物跡と推測される。床面中央に焼土が集まることから工房や作業所性格を持つ建物と推測される。

S I 04竪穴建物跡(第11図、図版3)

【位置】MA・MB51～53、MC52に位置する。

【確認状況】地山上面で黒褐色土の広がりを出し、精査により竪穴建物跡と判断した。

【規模・形態】平面形は、長辺5.55m、短辺5.25mの方形である。主軸方向はN-50°-Wである。床面付近での確認のため竪穴の深さは不明である。床全面には厚さ0.03～0.25mの貼床が認められるが、確認段階でやや削られた可能性がある。C-D断面のC側の壁溝の立ち上がりから、壁は垂直に近い角度で立ち上がると推測される。壁溝には幅0.06～0.40m、深さ0.25mの溝が巡ることから、板壁であったと推測される。本遺構の南側は、南西-北東方向の攪乱によって、西側一部がトレンチに

よって壊されている。本遺構に伴う柱穴は2基確認された。P1は長軸0.35m、短軸0.35m、確認面からの深さ0.30m。P2は長軸0.32m、短軸0.25m、確認面からの深さは0.55mである。本遺構南東側から長軸0.55m、短軸(残存部)0.35mの範囲で被熱痕跡が認められた。

【カマド】壁溝との位置関係からカマドの燃焼部の焼土面と考えられる。カマドの構築材は削平により消失したと考えられる。

【埋土】3層に分けた。1層は地山土と黒色土とが混和した壤土、2層は黒褐色～暗褐色の貼床、3層は2層由来の柱穴の埋め戻し土である。

【出土遺物】土師器(第20図-2、図版8)が出土した。2は推定口径約9.4cmの土師器の甕の口縁部破片である。傾きは、胴部側で直立気味であり、口端に向かってやや内傾し、丸みを帯びた口唇部でわずかに外反する。頸部にはオサエの痕跡が残る。器面調整は、横ナデ後にヘラ状工具による縦位のナデが施される。なお、横ナデの一部には、ヘラ状工具の使用による砂粒の移動が確認でき、ケズリ状の痕跡となっている。内面調整は横ナデである。

【所見・時期】平面形の特徴や、理化学的分析の結果から、11世紀中頃から12世紀中頃にかけての平安時代の建物跡と推測される。

(2) 柵列跡

SA03柵列跡(第12図、図版6)

【位置】LS46～47に位置する。

【確認状況】地山上面付近で10基の柱穴が確認された。精査の結果、建て替えが認められる柱穴列と判断した。

【規模・形態】P1・2・3の3基の柱穴からなる柱穴列である。北北東-南南西へ直線状に延びており、主軸方向はN-10°-Eである。柱列総長はP1-P3間で5.25m、P1'-P3"で推定5.15m。柱間はP1-P2間で2.50m、P2-P3間で2.75m、P1'-P2"間で2.40m、P2"-P3"間は推定2.75mである。柱穴の規模は、径0.35m～0.60mの円～楕円形で、深さは0.30～0.40m程度のものが多い。

【埋土】各柱穴の埋土は、地山土塊を多く含む黒～黒褐色壤土が主体である。柱痕跡や掘方埋土の単位を確認できるものはない。

【所見・時期】S102竪穴建物跡と軸方向に近いことから、古代の柵列跡と判断した。並行する2列は、建て替えに伴うものと考えられ、P2・3における切り合いから、東側の列(P1-P2"-P3")が西側の列(P1-P2-P3)よりも新しい。各柱穴はこの他にも小規模なピットと切り合うため、建て替えは複数回に及ぶ可能性がある。

SA12柵列跡(第13図、図版6)

【位置】LR、LS45に位置する。

【確認状況】地山上面付近で3基の柱穴が確認された。精査の結果、それらを柱穴列と判断した。

【規模・形態】5基の柱穴からなる柱穴列で、真ん中に位置するP2で建て替え(P2'→P2)が認められる。南東-北西方向へ直線状に延びており、主軸方向はN-80°-Wである。推定される柱列総長はP1-P3間で3.30m、柱間はP1-P2間で1.04m、P2-P3間で1.34mである。柱穴は、径0.40m前後の円～楕円形で、深さは0.16～0.50m程度である。深さは、真ん中に位置するP2がP1・3よりも0.20mほど深くなっている。

【埋土】各柱穴の埋土は、地山塊が多く混入する黒色壤土が主体である。柱痕跡や掘方埋土の単位を確認できるものはない。

【所見・時期】S102竪穴建物跡と軸方向に近いことから、古代の柵列跡と判断した。

(3) 焼土遺構

5基検出した。このうちSN27・28・29・93については、当初地山上に形成された焼土遺構群と捉えていたが、後に4基全てがS102堅穴建物跡内に分布し、貼床上に形成されていることが判明した。S102-S101のように堅穴建物床面に形成された焼土の可能性が高い。

SN08焼土遺構 (第8図中央)

【規模・形態】調査区北側基本土層B断面で確認した。長軸0.56m、短軸は不明である。断面における被熱部分の最大厚は0.05mほどである。

【断面観察】2層に分けた。1層は焼土ではなく、2層焼土の掻き出し等の作業に関連した人為堆積層の可能性がある。2層は掻き出し等の作業により、焼土がブロック化した様相を示す。

【所見】IIb層とIII層の間に形成されているため、平安時代の遺構と考えられる。本遺構はS104と重複する位置にあるが、平断面において新旧関係を明らかにすることはできなかった。

SN27焼土遺構 (第14図、図版6)

【規模・形態】南北2か所の焼土に分けられる。平面形態は共に不整形で、北側は長軸0.74m、短軸0.38m、南側は長軸0.96m、短軸0.52mである。断面における被熱部分の最大厚は0.08mである。

【断面観察】3層に分けた。1層は明褐色の焼土、2層は炭化物を含む明褐色の焼土。

SN28焼土遺構 (第14図、図版6)

【規模・形態】平面形態は不整形で、長軸0.82m、短軸0.62m、断面における被熱部分の最大厚は0.06mである。

【断面観察】4層に分けた。1層は強被熱範囲、1'層は1層よりも被熱の度合いが弱く、炭化物を含む。2層は炭化物を含む明褐色の焼土、3層は被熱変色の末端部である。

SN29焼土遺構 (第14図)

【規模・形態】平面形態は不整形で、長軸0.70m、短軸0.32m、被熱部分の厚さは計測出来なかった。

【断面観察】2層に分けた。1層は明褐色から褐色の焼土、2層は被熱変色の末端部である。

SN93焼土遺構 (第14図、図版7)

【規模・形態】東西2か所の焼土に分けられ、平面形態は不整形である。西側は長軸0.78m、短軸0.54m、断面における被熱部分の最大厚は0.06mである。東側は長軸0.50m、残存する短軸は0.20mである。

【断面観察】6層に分けた。1層は黒色の炭化物層、2層は強く被熱した明褐色焼土、3層は2層と比較して被熱の度合いが弱い褐色の焼土、5層はかき出しによる炭化物と焼土とが攪拌されている。

3 中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

SB09掘立柱建物跡 (第15図、図版5)

【位置】LR48、LS47~49、LT47~49に位置する。

【確認状況】中央部や北側はトレンチで壊され、東側は調査区外のため一部未検出であるが、地山上面付近で規則性をもって並ぶ13基の柱穴が確認された。精査の結果、それらを掘立柱建物跡と判断した。

【規模・形態】13基の柱穴からなる桁行3間、梁行3間の建物跡で、長軸方向はN-35°-Eである。柱穴の規模は長軸0.35~0.60m、短軸0.30~0.45m、確認面からの深さは0.15~0.45mで、そのうち、P4は建て替えが認められる。また、P1・4・13からは礎が出土している。柱間はそれぞれP1-P2間は1.90m、P2-P3間は1.60m、P3-P4間は1.45m、P5-P6間は1.80m、

P6-P7間は1.55m、P7-P8間は不明、P10-P11間は1.55m、間に柱穴があった可能性はあるが、P11-P12間は3.75m、P13-P14間は1.65mである。上部構造は不明である。S102と重複しているが、掘り込みの切り合いによる新旧確認はできなかった。

【埋土】全13基の柱穴のうち、P2・3・4・5・12から柱痕跡が認められた。それらの埋土についてP2・3・5は2層に、P4は3層に、P12は4層に分けた。掘方埋土の特徴は、いずれも1層と比較して地山土塊を多く含む埋土である。

【所見・時期】平面形や柱配置から中世の総柱建物跡と推測される。P1・4・13から出土した礫は廃絶儀礼に用いられた可能性がある。

S B26掘立柱建物跡（第16図、図版5）

【位置】LT50、MA49・51、MB49・50に位置する。

【確認状況】地山上面付近で規則性をもって並ぶ5基の柱穴が確認された。精査の結果、それらを掘立柱建物跡と判断した。

【規模・形態】5基の柱穴からなる桁行2間、梁行1間の建物跡で、主軸方向はN-40°-Wである。柱穴の規模は長軸0.28~0.40m、短軸0.19~0.36m、確認面からの深さは0.08~0.19mで、そのうち、P2・3からは柱痕跡が確認され、P5からは礫が出土した。桁行総長はP1-P4で5.75m、梁行総長はP1-P3で3.38mである。柱間はそれぞれP1-P2間4は1.71m、P2-P3間は1.13m、P4-P5間は3.24m、P1-P4間は5.46m、P3-P5間は4.96m、上部構造は不明である。

【埋土】黒~黒褐色埋土を主体とする。このうちP2・3・4・5の1層は柱痕跡に由来する可能性がある。

【所見・時期】主軸方向がS B09とほぼ同じであることから、S B09と同時期の中世の掘立柱建物跡と推測される。P5から出土した礫は、廃絶儀礼に用いられた可能性がある。

(2) 柵列跡

S A01柵列跡（第17図）

【位置】MC54・55に位置する。

【確認状況】地山上面付近で2基の柱穴を確認した。精査の結果、周辺から他に柱穴が確認されなかったため、柱穴列と判断した。

【規模・形態】2基の柱穴からなる柵列跡で、南東-北西方向へ直線状に伸びており、柱列総長はP1-P2間で1.96m、柱間はP1-P2間で1.82mである。主軸方向はN-45°-Wである。柱痕跡は認められなかった。柱穴の規模はP1が長軸0.12m、短軸0.08m、確認面からの深さは0.12m、P2は長軸0.14m、短軸0.12m、確認面からの深さは0.10mである。平面形は方形に近い。

【埋土】埋土の状況は不明である。

【所見・時期】S B09・26掘立柱建物跡と軸方向が近いことから、中世の柵列跡と判断した。

S A06柵列跡（第17図）

【位置】MB53、MC52・53に位置する。

【確認状況】地山上面付近で3基の柱穴を確認した。精査の結果、周辺から他に柱穴が確認されなかったため、柱穴列と判断した。

【規模・形態】3基の柱穴からなる柵列跡で、南西-北東方向へ直線状に伸びており、柱列総長はP1-P3間で3.54m、柱間はP1-P2間で1.60m、P2-P3間で1.46mである。主軸方向はN-60°-Eである。P3に柱痕跡が認められ、0.10m角の凝灰岩が上面から出土している。柱穴の規模はP1が長軸0.24m、短軸0.18m、確認面からの深さは0.54m、P2は長軸0.18m、短軸0.14m、

確認面からの深さは0.08m、P3は長軸及び短軸0.24m、確認面からの深さは0.16mである。ともに平面形は方形に近い。

【埋土】P1～3ともに地山土塊を比較的多く含む黒～黒褐色壤土を主体とする。P3のみ掘方埋土の土層が確認できる。

【所見・時期】SB09・26掘立柱建物跡と軸方向が近いことから、中世の柵列跡と判断した。P1の深さが突出するが、機能は不明である。P3から出土した礎は、柱の廃絶儀礼に用いられた可能性がある。

SA24柵列跡（第14図）

【位置】LR47、LS46に位置する。

【確認状況】地山上面付近で3基の柱穴を確認した。精査の結果、それらを柱穴列と判断した。

【規模・形態】3基の柱穴からなる柵列跡で、南西～北東方向へ直線状に延びており、柱列総長はP1～P3間で4.56m、柱間はP1～P2間で2.10m、P2～P3間で1.64mである。主軸方向はN-55°-Eである。柱穴の規模はP1が長軸0.32m、短軸0.28m、確認面からの深さは0.18m、P2は長軸0.50m、短軸0.36m、確認面からの深さは0.30m、P3は長軸0.56m、短軸及び確認面からの深さは0.38mである。P2・3に比べ、P1が浅い。

【埋土】埋土の状況は不明である。

【所見・時期】SB09・26掘立柱建物跡と軸方向が近いことから、中世の柵列跡と判断した。

4 時期不明の遺構と遺物

(1) 柵列跡

SA10柵列跡（第18図、図版5）

【位置】LT48～50、MA50に位置する。

【確認状況】地山上面付近で柱穴群を確認した。精査の結果、6基の柱穴で構成される柱穴列と判断した。

【規模・形態】南東～北西方向へ直線状に延びており、柱列総長はP1～P6間で10.10m、柱間はP1～P2間で1.45m、P2～P3間で1.65m、P3～P4間で1.90m、P4～P5間で1.95、P5～P6間で1.80mである。主軸方向はN-20°-Wである。P1・3に柱痕跡が認められ、P1～4の平面形態は方形である。

【埋土】黒色壤土を主体とする。P1・3にみられる掘方埋土は、地山混入量が多く、柱痕跡に比べしまりも強い。

【所見】P5出土の礎は、廃絶儀礼に用いられた可能性がある。

SA56柵列跡（第18図）

【位置】MB51・52に位置する。

【確認状況】地山上面付近で3基の柱穴を確認した。精査の結果、3基の柱穴で構成される柱穴列と判断した。

【規模・形態】南東～北西方向へ直線状に延びており、推定される柱列総長はP1～P3間で3.74m、柱穴の平面形態は方形である。柱間はP1～P2間で1.68m、P2～P3間で1.76mである。主軸方向はN-15°-Wである。

【埋土】全て単層で、地山土粒と塊とが黒色土と混和した黒色壤土である。

【所見】構成する柱穴は、SA57柵列跡の線上にあるが、近接するも重複関係にないため、個別の遺構と判断した。どちらかの柵列の建て替えに伴う痕跡の可能性もある。

SA57柵列跡（第18図）

【位置】MB51・52に位置する。

【確認状況】地山上面付近で柱穴群を確認した。精査の結果、3基の柱穴で構成される柱穴列と判断した。

【規模・形態】南東-北西方向へ直線状に延びており、推定される柱列総長はP1-P3間で2.88m、柱穴の平面形態は方形である。柱間はP1-P2間で1.46m、P2-P3間は不明である。主軸方向はN-20°-Wである。

【埋土】P1のみ柱痕跡と掘方埋土が確認できる。

【所見】構成する柱穴は、SA56櫛列跡の線上にあるが、近接するも重複関係にないため、個別の遺構と判断した。どちらかの櫛列の建て替えに伴う痕跡の可能性もある。

(2) 柱穴様ピット(第19・20図、図版7、第2・3表)

55基検出した。主に調査区南側に多く分布する。規模・平面形態・深さ・長軸方向等に規則性がなく、詳細は不明である。

SKP46からは土師器(第20図-3、図版8)が出土した。3は底形約5.8cm、残存高1.25cmの土師器甕の底部である。底面はやや上げ底である。底面中央部は剥落気味で、砂粒を付着させた土器のようにも見える。内面にはヘラ状工具による雑なナデ調整が施され、胎土には砂粒や小礫が比較的多く含まれる。

(3) 土坑

3基検出した。いずれも小規模で性格は不明である。

SK11土坑(第11・19図)

【位置】MB52・53に位置する。

【確認状況】地山上面付近で黒色土の広がりを確認した。精査の結果、土坑と判断した。S104と重複し、本遺構がS104の埋土を掘り込むため、本遺構が新しい。

【規模・形態】平面形態は楕円形で、底面は斜めに傾き、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向はN-52°-Wで、長軸0.86、短軸0.70m、確認面からの深さは0.37mである。

【埋土】単層である。しまりが弱く地山土を含む黒褐色壤土である。

SK16土坑(第19図)

【位置】LT48・49に位置する。

【確認状況】地山上面付近で黒色土の広がりを確認した。精査の結果、土坑と判断した。

【規模・形態】平面形態は楕円形で、底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向はN-5°-Eで、長軸1.00m、短軸0.88m、確認面からの深さは0.24mである。

【埋土】3層に分けられ、3・2層を1層が切っている。

【所見】3・2層堆積後に同じ場所を掘り返した可能性がある。

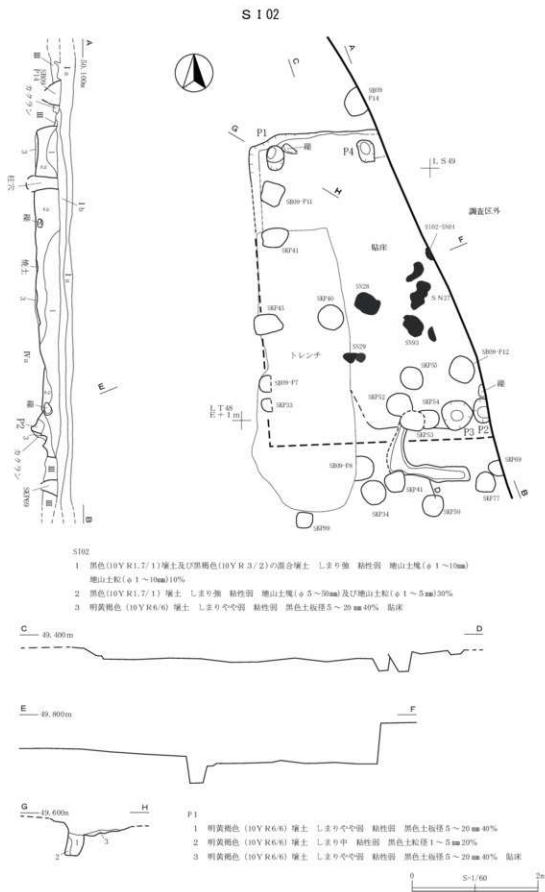
SK39土坑(第11・19図)

【位置】MA・MB53に位置する。

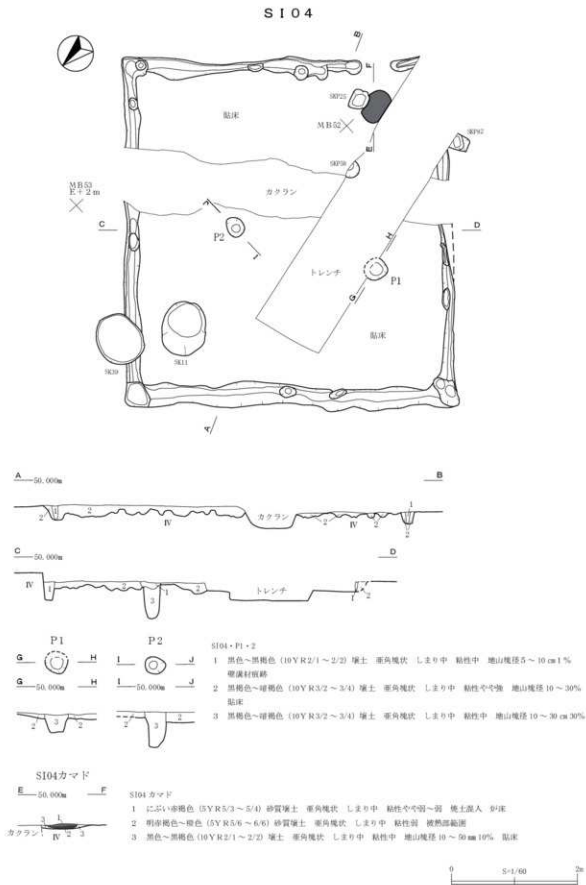
【確認状況】地山上面付近で黒色土の広がりを確認した。精査の結果、土坑と判断した。S104と重複し、本遺構がS104の埋土を掘り込むため、本遺構が新しい。

【規模・形態】平面形態は略円形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がる。主軸方向はN-85°-Eで、長軸0.84m、短軸0.70m、確認面からの深さは0.56mである。

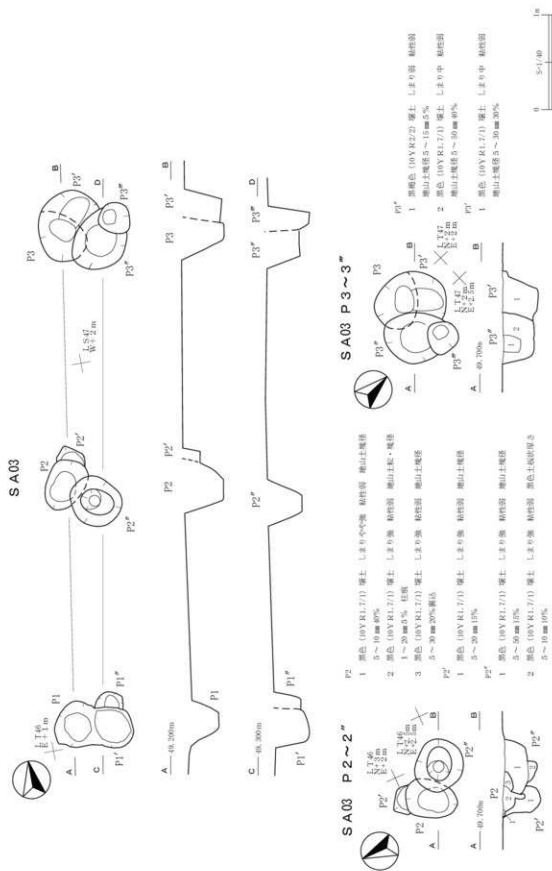
【埋土】単層である。植物根がマット状に発達した様子が認められる、しまりの弱い黒褐色壤土である。



第10図 S102 竪穴建物跡

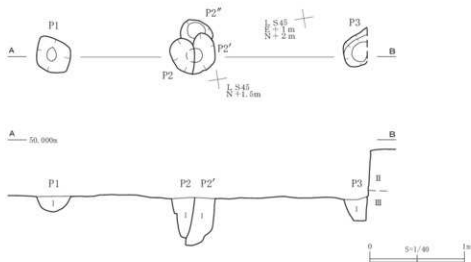


第11図 S104 竪穴建物跡



第12図 SA03 横列跡

SA12



SA12

P1

1 黒色 (10Y R1.7/1) 壤土 しまり中 粘性やや弱 堆山土塊径 30 mm、形状径 2～5 mm 15%

P2

1 黒色 (10Y R1.7/1) 壤土 しまり中 粘性やや弱 堆山土塊径 20～30 mm 20%

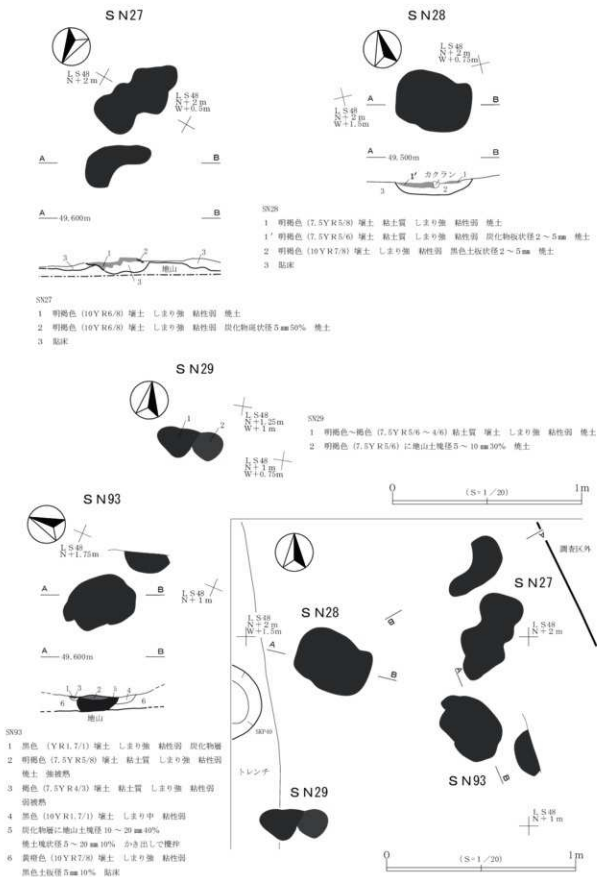
P2'

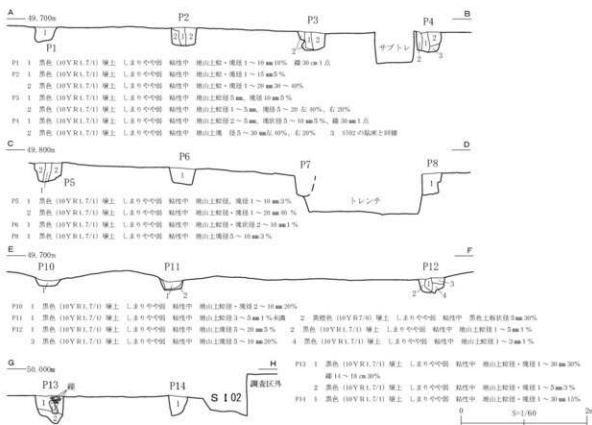
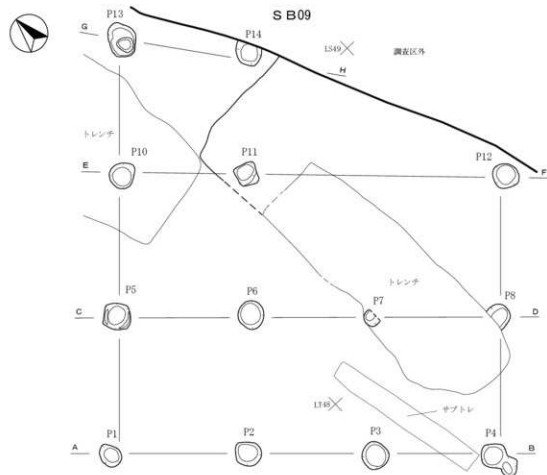
1 黒色 (10Y R1.7/1) 壤土 しまり中 粘性やや弱 堆山土塊径 5～20 mm 5%

P3

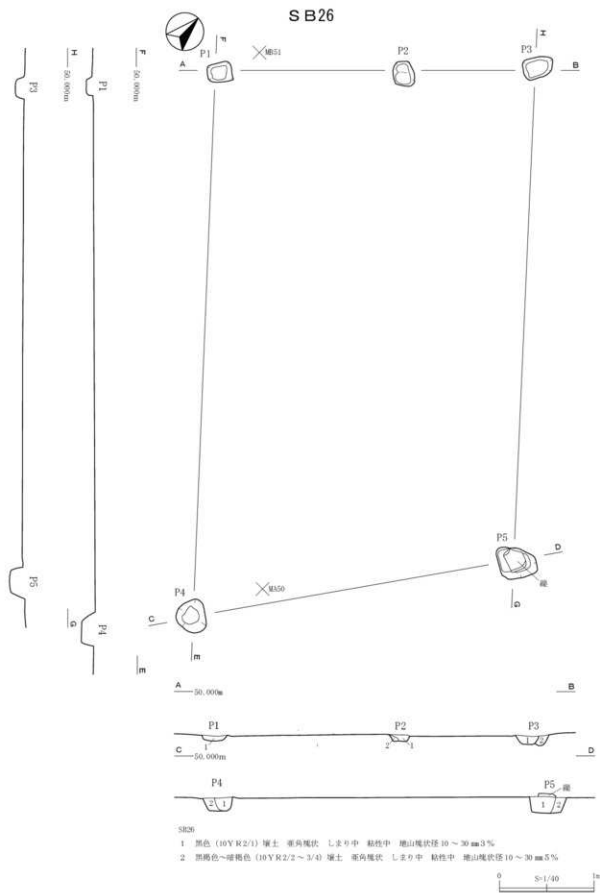
1 黒色 (10Y R1.7/1) 壤土 しまり中 粘性やや弱 堆山土和径 1～3 mm、塊径 5～20 mm 10%

第13図 SA12 掘列跡

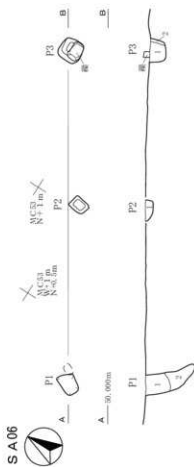




第15図 SB09掘立柱建物跡



第 16 図 SB26 掘立柱建物跡



SA06

1 黒色 (10Y R2/1) 壤土、垂直坑状、上より順、斜坑中、断面径10～30mm、5%

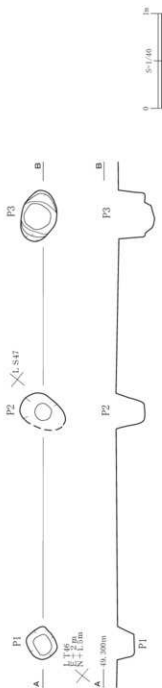
2 黒色 (10Y R1.7/1) 壤土、垂直坑状、上より中央部～底、斜坑中、植物の残片

1 黒褐色 (10Y R3/2) 壤土、垂直坑状、上より中央部、斜坑中、断面径10mm、5～10%

2 黒褐色 (10Y R2/1) 壤土、垂直坑状、上より中央部、斜坑中、断面径約5～30mm、5%、10mm色の磁器片、磁土、磁器片

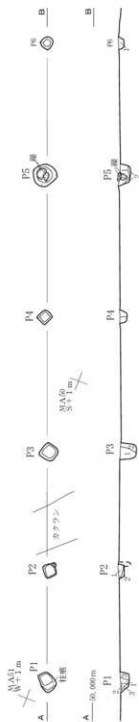
1 黒褐色 (10Y R3/2) 壤土、垂直坑状、上より中央部、斜坑中、断面径10mm、10%、磁器片、磁土、磁器片

SA24



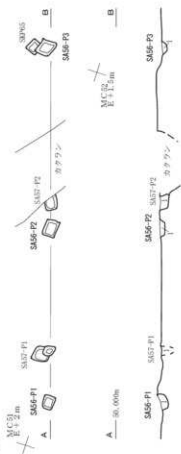
第17図 SA01・06・10 欄列跡

SA 10

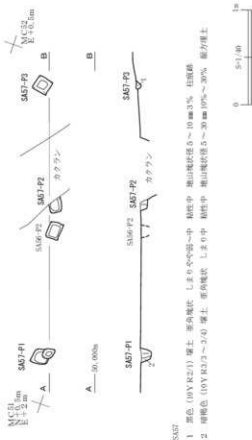
SA 10 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 10 ~ 30 mm 3% 柱状跡
 1 黒色 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 10 ~ 20 mm 5% 柱状跡
 2 暗褐色 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 10 ~ 30 mm 30% ~ 30% 融性埋土
 3 暗褐色 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 10 ~ 30 mm 30% ~ 30% 融性埋土

SA 56

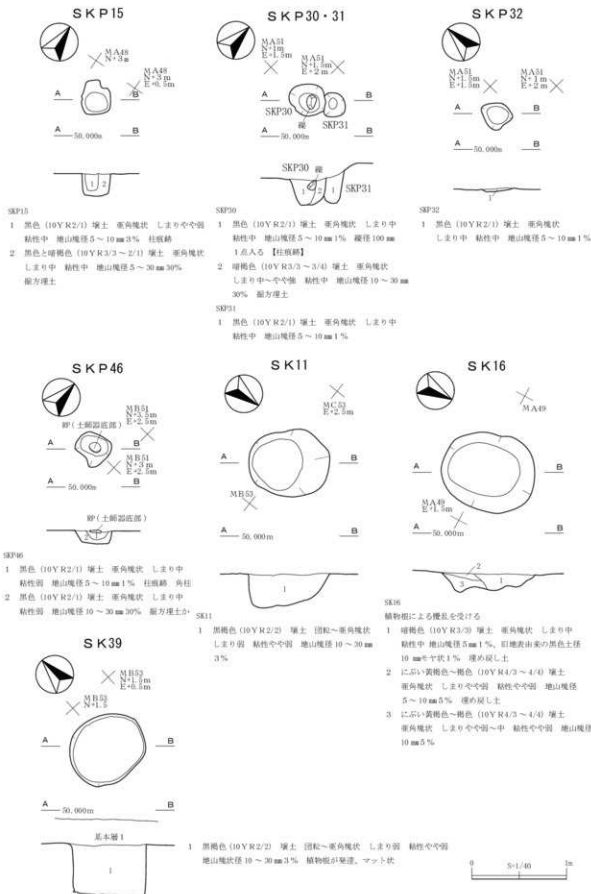
SA 56 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 5 ~ 10 mm 3%

SA 57

SA 57 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 5 ~ 10 mm 3% 柱状跡
 2 暗褐色 (10V R27) 塚土 垂直風状 しまり中 融性中 埋山風状 5 ~ 30 mm 10% ~ 30% 融性埋土

第 18 図 SA 10・56・57 横列跡



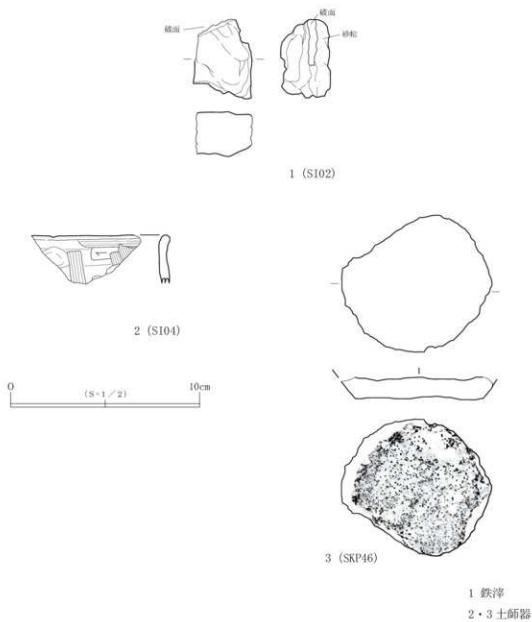
第19図 SKP15・30 ~ 32 柱穴標ピット、SK11・16・39 土坑

第2表 遺構柱穴計測一覧表

遺構名	番号	挿図番号	平面形態	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	検出面か らの深さ (m)	底面標高 (m)	重複 (旧→新)	備考
SI02	P1	第10図	楕円形	L S 49	0.40	0.25	0.35	48.88	—	—
SI02	P2	第10図	(残)楕円形	L R 47・48	0.40	0.25	—	49.51	—	—
SI02	P3	第10図	略円形	L R 47・48	0.50	0.47	—	49.22	—	—
SI02	P4	第10図	不整形	L S 49	0.35	0.25	—	49.87	—	—
SI04	P1	第11図	円形	MB 52	0.35	0.35	0.30	49.26	—	—
SI04	P2	第11図	楕円形	MA・MB 52	0.32	0.25	0.55	49.26	—	—
SA03	P1	第12図	(推)円形	L S 46	0.54	—	0.32	49.08	—	—
SA03	P1'	第12図	(推)円形	L S 46	—	—	0.34	49.02	—	—
SA03	P1*	第12図	不明	L S 46	—	—	0.28	49.05	—	—
SA03	P2	第12図	(推)楕円形	L S 46	0.58	0.39	0.42	49.03	—	—
SA03	P2'	第12図	不明	L S 46	—	—	0.18	49.28	—	—
SA03	P2*	第12図	(推)楕円形	L S 46	0.56	0.52	0.36	49.09	—	—
SA03	P3	第12図	不整形	L S 47	(推)0.66	(推)0.46	0.46	49.03	—	—
SA03	P3'	第12図	不明	L S 47	—	—	0.40	49.06	—	—
SA03	P3*	第12図	(推)楕円形	L S 47	—	—	0.36	49.12	—	—
SA03	P3*	第12図	円形	L S 47	0.34	0.30	0.44	49.01	—	—
SA12	P1	第13図	略方形	L S 45	0.38	0.34	0.16	49.22	—	—
SA12	P2	第13図	不整形	L S 45	0.40	0.26	0.42	—	P2'→P2	建て替え
SA12	P2'	第13図	不明	L S 45	(残)0.44	(残)0.22	0.50	48.85	P2'→P2	建て替え
SA12	P2*	第13図	不明	L S 45	0.38	(残)0.24	—	48.87	—	—
SA12	P3	第13図	不明	L R 45	(残)0.36	(残)0.28	0.24	49.09	—	—
SB09	P1	第15図	楕円形	L T 48	0.26	0.30	0.18	49.33	—	礎
SB09	P2	第15図	円形	L T 48	0.28	0.24	0.20	49.27	—	—
SB09	P3	第15図	円形	L S・L T 47	0.30	0.28	0.19	49.20	—	—
SB09	P4	第15図	不整形	L S 47	(残)0.30	(残)0.25	0.22	49.17	P4→P4'	建て替え、礎
SB09	P4'	第15図	楕円形	L S 47	0.24	0.19	0.32	49.18	P4→P4'	建て替え、礎
SB09	P5	第15図	方形	L T 48	0.30	0.28	0.21	49.28	—	—
SB09	P6	第15図	円形	L S・L T 48	0.32	0.27	0.18	49.22	—	—
SB09	P7	第15図	—	L S 48	(残)0.18	—	(推)0.22	49.06	—	—
SB09	P8	第15図	—	L S 47	—	—	(残)0.23	49.07	—	—
SB09	P10	第15図	略円形	L S・L T 49	0.30	0.28	0.15	49.20	—	—
SB09	P11	第15図	方形	L S 48	0.25	0.22	0.12	49.14	—	—
SB09	P12	第15図	円形	L R 48	0.31	0.26	0.18	49.11	—	—
SB09	P13	第15図	不整形	L S 49	0.60	0.45	0.45	49.11	—	礎
SB09	P14	第15図	(推)楕円形	L S 49	(残)0.34	(残)0.28	0.22	49.28	—	—
SB26	P1	第16図	方形	MB 50	0.28	0.19	0.08	—	—	—
SB26	P2	第16図	略方形	MA 51	0.28	0.24	0.06	—	—	柱痕跡
SB26	P3	第16図	略方形	MA 51	0.34	0.20	0.11	—	—	柱痕跡
SB26	P4	第16図	不整形	MA 49	0.37	0.36	0.14	49.41	—	—
SB26	P5	第16図	不整形	L T 50	0.40	0.36	0.19	49.42	—	礎
SA01	P1	第17図	方形	MC 55	0.12	0.08	0.12	49.45	—	—
SA01	P2	第17図	方形	MC 54	0.14	0.12	0.10	49.52	—	—
SA06	P1	第17図	略方形	MC 52	0.24	0.18	0.54	—	—	—
SA06	P2	第17図	略方形	MB 53	0.18	0.14	0.08	—	—	柱痕跡、上面に凝灰岩
SA06	P3	第17図	方形	MB 53	0.24	0.24	0.16	49.60	—	柱痕跡
SA24	P1	第17図	方形	L S 46	0.32	0.28	0.18	49.25	—	—
SA24	P2	第17図	楕円形	L R・L S 46	0.50	0.36	0.30	49.14	—	—
SA24	P3	第17図	楕円形	L R 47・48	0.56	0.38	0.38	49.03	—	—
SA10	P1	第18図	方形	MA 50	0.30	0.25	0.08	—	—	—
SA10	P2	第18図	方形	MA 50	0.20	0.2	0.06	—	—	柱痕跡
SA10	P3	第18図	方形	L T・MA 50	0.25	0.25	0.18	—	—	—
SA10	P4	第18図	方形	L T 49	0.20	0.17	0.10	49.46	—	—
SA10	P5	第18図	略方形	L T 49	0.40	0.34	0.20	49.42	—	礎
SA10	P6	第18図	方形	L T 48	0.20	0.18	0.10	—	—	—
SA56	P1	第18図	方形	MB 51	0.16	0.12	0.14	49.45	—	—
SA56	P2	第18図	方形	MB 51	0.20	0.14	0.06	49.44	—	—
SA56	P3	第18図	略方形	MB 52	0.18	0.16	0.06	49.49	SKP65→P3	—
SA57	P1	第18図	不整形	MB 51	—	—	0.12	49.52	—	柱痕跡
SA57	P2	第18図	(推)方形	MB 51	0.18	0.12	0.08	49.42	—	—
SA57	P3	第18図	方形	MB 51	0.16	0.15	0.06	49.52	—	—

第3表 柱穴様ビット計測一覧表

遺構名	番号	平面形態	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	検出面から の深さ (m)	底面標高 (m)	重複 (旧→新)	備考
SKP	13	不整形	L S 44・45	0.40	(残)0.26	0.18	49.19	—	
SKP	14	不整形	L S 45	0.33	0.23	0.24	49.14	—	
SKP	15	不整形	L T 48	0.36	0.32	0.23	49.37	—	柱痕跡あり
SKP	17	円形	L S 45	0.26	0.25	0.18	49.20	—	
SKP	18	(推) 楕円形	L S 45	(推)0.28	(推)0.20	0.15	49.23	—	
SKP	21	楕円形	MB 50	0.24	0.20	0.21	49.40	—	
SKP	22	楕円形	L S 45	0.37	0.30	0.46	48.94	—	
SKP	23	方形	L R 47	0.27	0.23	0.40	49.02	—	
SKP	24	方形	L R 46	0.22	0.22	0.20	49.24	—	
SKP	25	不整形	MA 51	0.38	0.32	0.09	49.45	カマド→25	
SKP	26	不整形	L R・L S 45	0.46	0.31	0.32	49.03	—	
SKP	28	(推) 楕円形	L S 45・46	(残)0.24	(推)0.22	0.11	49.27	29→28	西側は調査区外
SKP	29	(推) 楕円形	L S 45・46	(残)0.30	(推)0.27	0.23	49.15	29→28	西側は調査区外
SKP	30	円形	L T 51	0.42	0.36	0.28	49.29	31→30	露出土
SKP	31	(推) 円形	L T 51	0.26	(残)0.22	0.32	49.33	31→30	
SKP	32	不整形	L T 51	0.36	0.30	0.04	49.55	—	
SKP	33	(推) 円形	L S 48	(残)0.24	(残)0.16	0.37	48.93	—	
SKP	34	円形	L S 47	0.44	0.39	0.56	48.86	—	
SKP	35	不整形	L S 47	0.48	0.36	0.41	49.04	—	
SKP	40	円形	L S 48	0.40	0.40	0.46	48.85	—	
SKP	41	不整形	L S 48	0.47	0.30	0.37	49.00	—	
SKP	43	不整形	L S 47	0.37	0.36	0.18	49.24	—	
SKP	44	円形	L R 47	0.49	0.46	0.50	48.95	—	
SKP	45	方形	L S 48	0.45	0.30	0.38	48.97	—	
SKP	46	不整形	MA 51	0.36	0.30	0.04	49.52	—	土師器底部 出土
SKP	47	楕円形	L S 47	0.42	0.36	0.45	48.96	—	
SKP	50	円形	L R・L S 47	0.38	0.33	0.43	49.00	—	
SKP	52	(推) 円形	L S 48	0.42	(残)0.36	0.21	49.15	52→53	
SKP	53	(推) 楕円形	L S 47・48	(推)0.40	(推)0.32	0.26	49.13	52→53	
SKP	54	(推) 楕円形	L R 47・48 L S 47・48	(残)0.25	0.29	0.24	49.21	54→53	
SKP	55	楕円形	L S 48	0.39	0.25	0.25	49.09	—	
SKP	58	(推) 円形	L S 49	(推)0.29	(残)0.18	0.21	49.43	—	
SKP	64	不整形	MB 51	0.41	0.38	0.14	49.42	—	
SKP	65	方形	MB 52	(残)0.14	(残)0.12	0.05	49.49	65→S A 56→P 3	
SKP	68	不整形	L S 47	0.36	0.29	0.26	49.23	—	
SKP	69	(推) 楕円形	L R 47	(残)0.24	0.24	0.16	49.27	—	東側は調査区外
SKP	70	円形	L S 46	0.34	0.33	0.34	49.13	—	
SKP	72	不明	L S 47	(残)0.37	(残)0.14	0.49	48.98	—	
SKP	73	円形	L T 46	(推)0.30	(推)0.30	0.22	49.22	不明	81と重複する
SKP	74	不整形	L S 47	0.36	0.26	0.30	49.18	—	
SKP	75	方形	L S 46	0.30	0.29	0.28	49.17	—	
SKP	76	楕円形	L S・L T 47	0.40	0.29	0.27	49.22	—	
SKP	77	不整形	L R 47	0.34	0.32	0.30	49.12	—	
SKP	79	楕円形	L S・L T 47	0.48	0.36	0.30	49.19	—	
SKP	80	不整形	L S 47	0.30	0.22	0.21	49.26	—	
SKP	81	(推) 楕円形	L T 46	(残)0.29	(残)0.22	0.24	49.22	不明	73と重複する
SKP	82	不明	MB 51	(残)0.26	(残)0.24	0.24	49.29	—	
SKP	84	楕円形	MC 55	0.24	0.20	0.43	49.15	—	
SKP	87	不明	L S 46	0.26	0.20	0.37	49.11	—	
SKP	88	不整形	L S 45	0.22	0.18	0.18	49.22	—	
SKP	89	方形	L S 47	0.26	0.24	0.20	49.26	—	
SKP	90	不整形	L S 46	0.22	0.20	0.08	49.15	—	
SKP	91	楕円形	L R 47	0.40	0.29	0.12	49.32	—	
SKP	92	楕円形	L S 47	0.27	0.18	0.19	49.31	—	
SKP	94	円形	L T 47	0.25	0.22	0.14	49.40	—	



第20図 出土遺物

第4章 理化学的分析

株式会社吉田生物研究所

第1節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

秋田県北秋田市綴子字深沢地内に所在する岩坂下遺跡より検出されたS I 02堅穴建物跡の床面直上の焼土遺構付近から出土した炭化材1点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表4表 測定試料および処理

試料No.	試料データ	前処理
1	種類: 炭化材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)

3 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal1の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第5表 放射性年代測定及び暦年較正の結果

試料No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	-26.15 \pm 0.31	926 \pm 22	925 \pm 20	1047-1084 cal AD (35.41%) 1094-1103 cal AD (6.46%) 1124-1142 cal AD (13.92%) 1146-1161 cal AD (12.49%)	1036-1175 cal AD (95.03%) 1196-1198 cal AD (0.42%)

参考文献

中村俊夫 2000 放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の ^{13}C 年代編集委員会編「日本先史 時代の ^{13}C 年代」
日本第四紀学会 3-20頁

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1) 337-360頁

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grooten, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4) 1869-1887頁

第2節 樹種同定

1 試料

試料は秋田県北秋田市綴子字深沢地内に所在する岩坂下遺跡から検出されたS I 02堅穴建物跡の床面直上の焼土遺構付近から出土した炭化材1点である。

2 観察方法

数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、研磨して木口（横断面）、柃目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（樹皮1種）の表（第6表）と顕微鏡写真（第21図）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

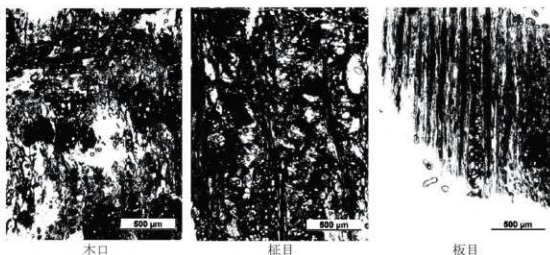
(1) 広葉樹の樹皮

木口面と柃目面では死滅した篩部、軸方向柔細胞、じん皮繊維が入り込みながらも程度層をなして並んでいる。途切れ途切れの放射組織が見られる。板目面では単列の放射組織と死滅した篩部、じん皮繊維、軸方向柔細胞の複雑に入り混じった状態が見られる。

木部の道管にあたる篩部が確認される等、個々の構成要素の確認はできて広葉樹と判断できる。しかし、樹種同定に必要な各構成要素の配列が著しく崩れている為、広葉樹以上の樹種同定には至らなかった。

第6表 出土炭化材同定表

No.	樹種
1	広葉樹の樹皮



第21図 No. 1 広葉樹の樹皮写真

参考文献

- 奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」
 奈良国立文化財研究所 1993 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」
 島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版
 林 昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
 北村四郎・村田 源 1979 「原色日本植物図鑑本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所

使用顕微鏡

Nikon DS-Fil

第3節 種実同定

1 試料と方法

試料は第7表にあるとおり秋田県北秋田市綴子字深沢地内に所在する岩坂下遺跡より検出されたS I 02堅穴建物跡の床面直上の焼土遺構から採取された炭化物混じりの土である。

検出及び同定方法は、この土を約2.0mm篩で水洗し、種実以外の有機質、無機質を取り除き、取り出された種実の選別を行う。選別を行う種実は種類ごとに全量計数をする。約2.0mm篩から除外される小さい種実については、水をはったタッパー等に浮かせて検出と選別を同様に行う。分類同定は肉眼および実体顕微鏡下で行い、同定は現生標本との対比で行う。

2 結果

有機質の検出は種実以外の有機質と炭化物のみで、種実は検出されなかった(第22図写真1・2)。

第7表 種実同定試料表

採集位置	採集年月	備考
SI02SN1 の上の土	22.07.21	竪穴建物跡床直上焼土遺構上に堆積した炭化物混じり土

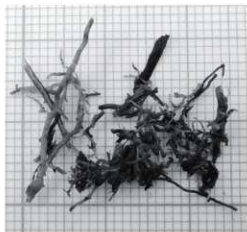


写真1 有機物



写真2 炭化物

第22図 分析結果写真

第5章 総括

岩坂下遺跡の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴建物跡2棟、櫛列跡2条、焼土遺構5基、中世の掘立柱建物跡2棟、櫛列跡3条と、時期不明の櫛列跡3条、柱穴様ビット55基、土坑3基である。遺物は、縄文時代の石器と平安時代の鉄滓、土師器片、近世の陶磁器である。ここではそれらをもとに本遺跡について概観し、まとめとしたい(第23図)。

平安時代(第23図左)

S I 04竪穴建物跡は炭化物の理化学的分析で、11世紀中頃から12世紀中頃にかけての年代結果が出ている。S I 02・04竪穴建物跡は軸方向が異なるため、時期差をもつ可能性がある。S I 02竪穴建物跡から出土した鉄滓は、貼床下からの出土のため、竪穴建物跡が営まれる以前に遺跡周辺で鉄生産が行われていた可能性が高い。建物中央部の床面からは複数の焼土遺構を検出したものの、鍛冶炉や鍛造剥片を確認していないため、鍛冶作業を証拠づけるものはない。しかしながら、米代川流域の能代市鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡及び竜毛沢Ⅱ・Ⅳ遺跡、北秋田市法泉坊沢Ⅱ遺跡、大館市釈迦内中台Ⅰ遺跡等の事例等から、製鉄関連の工房もしくは作業場所であった可能性がある。

米代川流域では10世紀に鉄生産技術が広まったとされており、平安時代において本遺跡もそうした潮流の中にあっただと考えられる。

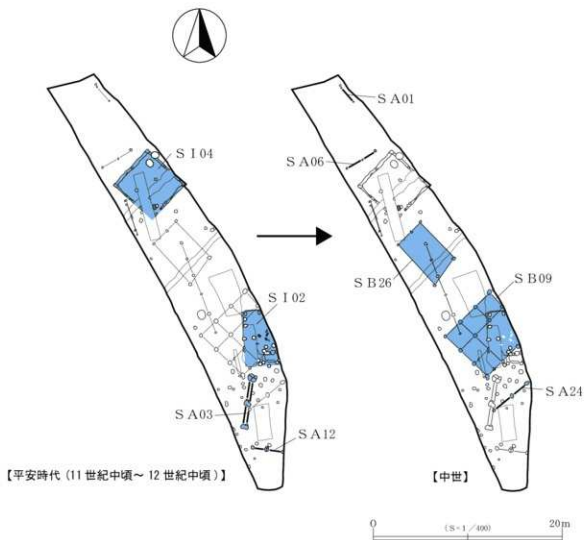
2棟の竪穴建物跡が東側の調査区外に延びていることから、糠沢川右岸の河岸段丘上に集落が広がっている可能性が高く、鉄関連遺構をはじめ、古代の生活痕跡が残されていると推測される。なお、S I 02竪穴建物跡と軸方向に近いS A 03・12櫛列跡は当該期に属するものと判断した。

中世(第23図右)

中世に属する遺構として、本遺跡からは掘立柱建物跡2棟、櫛列跡3条を検出した。S B 09・26掘立柱建物跡は、規模は異なるが主軸方向はともに北西である。S B 09掘立柱建物跡は、東側の調査区外へ続いていることから、集落は中世においても平安時代と同様に東側調査区外へ広がる可能性がある。なお、S B 09・26掘立柱建物跡と軸方向が近いため、S A 01・06・24櫛列跡を当該期に属するものと判断した。

本遺跡周辺において、中世の発掘調査事例は少ないが、米代川を挟み対岸に位置する脇神館跡は、本遺跡と立地がやや異なるものの、本遺跡と同じ平安時代から中世にかけての遺跡である。掘立柱建物の他に長方形プランをもつ竪穴建物跡や炭化米等が検出されている。このような遺跡との比較・検討も、当該期の様相を明らかにする上で欠かせない作業となろう。

今回の岩坂下遺跡の調査は、南北に細く延びる550㎡という範囲の上、現在の水田造成・耕作によって大きく削平を受けたことから、遺構・遺物ともに少なく、かつてこの地で営まれていた集落の全体像をつかむには至らなかった。しかし、わずかではあるが検出・出土した遺構・遺物から、本遺跡は縄文時代・古代・中世・近世にわたって人々の生活・生産の場となり、集落が廃絶した後は、水田が営まれて現代まで断続的に利用されてきたことが分かった。



第23図 遺構変遷図

参考文献

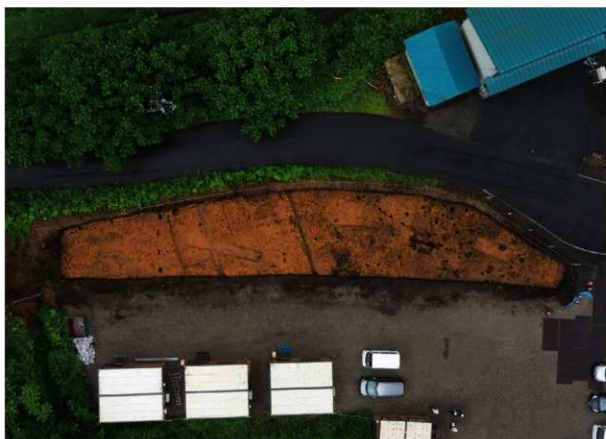
- 秋田県教育委員会 『竜毛沢館跡』 秋田県文化財調査報告書第188集 1990 (平成2) 年
 秋田県教育委員会 『法泉坊沢Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第278集 1998 (平成10) 年
 秋田県教育委員会 『脇神館跡』 秋田県文化財調査報告書第284集 1999 (平成11) 年
 秋田県教育委員会 『鶴巣館遺跡・鶴巣Ⅰ遺跡・鶴巣Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第422集 2007 (平成19) 年
 秋田県教育委員会 『釈迦内中台Ⅰ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第426集 2008 (平成20) 年
 秋田県教育委員会 『竜毛沢Ⅳ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第528集 2023 (令和5) 年



遺跡全景（上から）



遺跡遠景（北東から）



調査区全景（上から）



調査区北端（南から）



調査区北端（北から）



S104完掘（西から）



S104遺物出土状況（南から）



S104カマド断面（西から）



調査区中央（北から）



基本土層C（西から）



S102完掘（北から）



S102張り出し清断面（西から）



基本土層D（西から）



S B09完掘（北西から）



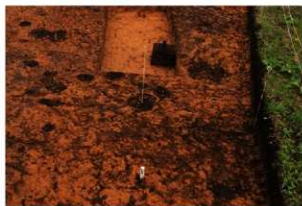
S B26・S A10確認状況（東から）



SKP58・59・60・61 (SA03・07) 断面 (南西から)



SKP58・59・60・61 (SA03・07) 完掘 (南西から)



SA12確認状況 (南から)



SA12完掘 (南から)



SN27確認状況 (西から)



SN27断面 (北から)



SN28確認状況 (西から)



SN28断面 (西から)



S N93確認状況（西から）



S N93断面（西から）



調査区南端（南から）



調査区南端（北東から）



S K P46遺物出土状況（東から）



S K P46遺物出土状況（南から）



基本土層E（東から）



出土遺物（鉄滓）



出土遺物（土師器甕）



出土遺物（土師器甕）

※全て実物大

報告書抄録

ふりがな	いわさかしたいせき							
書名	岩坂下遺跡							
副書名	県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線（岩坂下工区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第537集							
編著者名	富樫那美 山村剛 村上義直							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋 20 番地 TEL. 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号 TEL. 018-860-5193							
発行年月	西暦 2024 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩坂下遺跡	秋田県北秋田市 一里にあり、その中心に 縦字字深沢地内	05213	213-11-88	40° 16' 24"	140° 23' 35"	20220704 ～ 20220805	550 m ²	県単道路改築事業 一般県道矢坂糠沢線 (岩坂下工区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岩坂下遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 中世 江戸時代 時期不明	竪穴建物跡 櫓列跡 焼土遺構 掘立柱建物跡 櫓列跡 櫓列跡 柱穴線ビット 土坑	2棟 2条 5基 2棟 3条 3条 55基 3基	剥片 土師器 鉄滓 陶磁器	縄文時代から現在まで断続的に生活の場として使用されていた。		
要約		米代川支流糠沢川右岸、標高50mの河岸段丘上に立地する集落跡である。縄文時代から現在まで断続的に生活の場として利用されてきたと推測されるが、竪穴建物跡から出土した炭化物の年代測定から、主に11世紀中頃から12世紀中頃の集落跡と推測される。また、南側竪穴建物跡の貼床下からは鉄滓が出土しており、竪穴建物跡が営まれる以前に遺跡周辺で鉄生産が行われていた可能性がある。						

秋田県文化財調査報告書第 537 集

岩坂下遺跡

—県単道路改築事業一般県道矢坂糠沢線(岩坂下工区)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 令和 6 (2024) 年 3 月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市弘田字牛嶋20番地
電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社三森印刷

